**難民を助ける人・利用する人―関連DVDの紹介―**

フランス語専攻　荒井　文雄

残りの時間で、難民と先住の市民との関係をあつかったDVDをいくつか紹介したいと思います。すべてフィクションですが、ほんとうに起こっている現実のできごとの構造や問題点をよくわからせてくれる作品です。

一つ目は、フィリップ・リオレ監督の

「君を想って海をゆく」（原題：Welcome）です。

http://www.allcinema.net/prog/show\_c.php?num\_c=338255

予告編：

https://www.youtube.com/watch?v=z\_bQXkIvonk

　この映画は、イギリスに行くために英仏海峡のフランス側の町カレーに多くの難民たちが集まってきて「ジャングル」と呼ばれるキャンプを形成していることを背景としています。今日のテーマである「難民」と先住の「市民」という関係から注目されることは、この映画の中で、難民を自分の家に泊めた「フランス人」が警察に捕まるというストーリーがあることです。主人公は警官からはっきりと「彼らを助けるのは犯罪だ」と言われます。

　フランスには、不法滞在者を家に泊めたりして援助することを禁止する法律があります。密航や不法労働の請負業者や人身売買などを取り締まるのが主要な目的であるのは理解できますが、それが「難民」と「市民」を分断するように作用しているのがこの映画では、はっきりと描かれています。

　難民を助けた市民が罰せられるというのは現実でもしばしば起こっています。たとえば、Rob Lawrieというイギリス人の男性が2015年の10月にイギリスに向かうフランス側の国境で逮捕されました。正式な滞在許可を持っていないアフガニスタン人の4才の女の子を車に乗せていたからです。というのも、この人は、女の子の父親から彼女をイギリスのリーズにあるアフガンニスタン人のコミュニティーまで連れて行ってほしいと頼まれ、それを引き受けたからです。父親は、テントやブルーシートの下で暮らしている難民キャンプでは、娘の教育や健康、それどころか生命の危険があると判断したからでした。Lawrieさんは、5年の懲役と3万ユーロの罰金を課される恐れがあります。

（ル・モンド紙の以下の記事による：

http://www.lemonde.fr/police-justice/article/2016/01/14/un-anglais-juge-pour-delit-de-solidarite\_4846848\_1653578.html#meter\_toaster　）

　フランス南部でも72才になる元大学教員が難民を車に乗せて駅まで連れて行ったことで逮捕されました。この人は2015年の12月に1500ユーロの罰金を課されました。その裁判の時には、何人もの支援者が「自分も不法滞在者を助けたことがあります。どうぞ告発してください」と書いた紙を掲げて抗議していましたが、困窮している人に何らかのことをしてあげたくなるというのは、市民として自然な反応ではないかと思います。

（以下のMediapart の記事による：

https://blogs.mediapart.fr/resf/blog/231215/proces-delit-de-solidarite-nice-un-verdict-peu-courageux-et-dangereux　）

　善意で難民に手を差し伸べた人が罰せられる一方で、追い込まれた難民たちを利用して金もうけをしようという人たちもいます。たとえば、密航のあっせんをする業者がいます。2016年の1月にこのフォーラムで見た、マイケル・ウインターボトム監督の映画In This Worldの中でも、アフガニスタンから6000キロを移動する主人公たちの道のりの中継点ごとに、そうした業者が難民たちから金を要求していました。

In This World

http://www.allcinema.net/prog/show\_c.php?num\_c=318607

予告編：

https://www.youtube.com/watch?v=iirGjM3T5QI

　ヨーロッパの国々の内部でも、難民や不法滞在者を金もうけに利用する人たちがいます。ケン・ローチ監督の

「この自由な世界で」（原題：It’s a Free World !）

（原題の中のFree Worldというのはもちろん「自由主義経済世界」のことです。）

http://www.allcinema.net/prog/show\_c.php?num\_c=330796

予告編：

http://eiga.com/movie/53718/video/

本学所蔵：図書館１階 778.233||LOA

この映画では、人材派遣会社からリストラされたシングルマザーの主人公が、「何でもあり」の自由主義経済の最底辺の部分に入り込み、不法滞在者の労働斡旋業でひと儲けしようとします（「不法移民なら従順だから儲かるぞ」という工場主のセリフもあります）。

また、ベルギーのダルデンヌ兄弟監督の

「イゴールの約束」（原題：La promesse約束）

http://www.allcinema.net/prog/show\_c.php?num\_c=54713

予告編：

http://www.allocine.fr/video/player\_gen\_cmedia=19466070&cfilm=14764.html

本学所蔵：図書館１階 778.2358||DAR

という映画でも、不法滞在者を建設現場にあっせんし、条件の悪い住居に押し込めて金を稼ぐ業者の世界が扱われています。主人公の少年は、あっせん業者の父親の手足となってあくどいことも平気でやっているのですが、アフリカ出身の女性とその赤ん坊を助けるために、父親を裏切り、対立するところに追い込まれてゆきます。

もう一つ、ダルデンヌ兄弟監督の映画に、

「ロルナの祈り」（原題：La silence de Lorna ロルナの沈黙）

http://www.allcinema.net/prog/show\_c.php?num\_c=331785

予告編：

https://www.youtube.com/watch?v=HIShW3LZ4ws

があります。この映画で扱われている問題は、「偽装結婚」です。ヨーロッパの国に合法的にとどまるために、形式だけの結婚をして滞在資格を手に入れようとする「外人」とそこから金をとって偽りの結婚をアレンジし、そのために重大な犯罪を犯す人々が描かれています。主人公のロルナは自分の滞在資格のために、そして金のためにこの犯罪に加担します。

　今日私が紹介した映画はみな悲しく、私たちのように、世界の安全で恵まれた側にいる人間にとっては、時には見るのがつらくなるような映画です。しかし、これらの映画は、フィクションでありながら、繁栄する西欧世界のシステムのしわ寄せとほころびの現実をよくわからせてくれます。不法滞在や不法労働の当事者はもちろんのこと、それを利用して金儲けしようとする人々も、システムの中で追いつめれらた人々であることもよくわからせてくれます。システムの利権からこぼれ落ち、「パイの分け前」にあずかれない人々の絶望的でやみくもな行動や心理は、テロのようなかたちを取って暴力的に噴出することにもなりかねませんが、そうした絶望と破壊的行動への歯止めとなる「人間的」な感情―恐れやためらいや不正に対する怒りなど－もこれらの作品はしっかりと描いています。「この自由な世界で」、「イゴールの約束」、「ロルナの祈り」では、母親と子ども（赤ん坊）が物語の核になっていますが、それは社会の不正や矛盾が、こういう弱い者たちに一番きびしくのしかかることを示しているとともに、母と子の生き延びるための戦いが「人間的」なものの最後の基盤になっていることも示唆していると思います。

　ケン・ローチ、ダルデンヌ兄弟、マイケル・ウインターボトムといったいわゆる「社会派」の映画監督は、これ以外にも大変優れた作品が多くあります。映像作品を通して、現代世界をよりよく学ぶこともできます。